

2212 離島覚書（宮城県・朴島）



令和4年8月23日

災害公営住宅

民宿外川で朴島に行く無料の渡船があると聞き、連絡してもらった。13時に寒風沢島を出発した。寒風沢島と野々島を結ぶ渡船は以前来た時に利用したことがあるが、最近では朴島にも行くことになったようだ。航路の両側には種ガキを養成する棚がずらりと並ぶ。約5分で朴島に着いた。朴島には2014（平成26）年6月に震災後の調査で来ているので、8年ぶり2回目の訪問である。

朴島の船客待合所のベンチに14時発の塩竈市営汽船を待っている人がいた。飲料を寒風沢島で用意してこなかったため、島に自動販売機がないかどうかを尋ねると、復興工事が行われていた時はあったが、工事関係者が去ってからは撤去されたという。待合所にトイレはなく、船着場の手前に簡易式のもので用意されていた。

朴島は面積0.34 km²、周囲2.2 kmで、浦戸諸島の有人4島の中では最も小さく、しかも松島湾の比較的奥まったところに位置している。船着場と集落は島の南側にある。

朴島は寒風沢島と宮戸島（橋で本土と結ばれている）の背後、つまり両島の北側の内海に位置することから、寒風沢水道から侵入してきた津波の影響は相対的に小さかった。ただし防波堤は破壊され、集落の家は床下浸水した。加えて地盤が沈下したため、満潮時には浸水するようになる。一方、古い家が多かったこともあり、津波よりも地震の影響の方が大きかったのである。当時の塩竈市の調査では全壊4棟、大規模半壊7棟、半壊2棟と認定されている。幸い人命への被害はなかった。

全壊した建物は解体処分され、跡地には塩竈市の災害公営住宅が建っていた。2015（平成27）年度に完成している。住宅は2軒長屋が2棟、戸建てが1棟である。これとは別に船客待合所が付帯した集会所が1棟建つ。あわせて5世帯分で、2世帯分は2DK、3世帯分は

3DKの間取りだ。現在、長屋のそれぞれ1部屋が空き家になっており、実際に住むのは3戸だけになっている。1部屋は高齢者が住んでいたが、体が弱くなり、本土側の施設に入居したため、島を離れたという。

震災前から残っている家は5棟である。北はずれの川畑敏雄、栄彦の兄弟、尾形勝利さん、内海さん宅の4棟と、神社の下の家だが、こちらは震災以来空き家になっている。このうち内海さん宅は奥さんの実家で、種ガキ生産の仕事の時に使っており、通常は寒風沢島に居住している。

したがって朴島の住人は、災害公営住宅の3戸と震災前から残る家に住む3戸（内海さんを除く）の6戸9人になる。

震災前の2010年国勢調査時は10戸、24人だったが、2015年国勢調査時には6戸、12人と半減した。その後、世帯数は変わらないものの、人口はさらに減っている。

集落の前の護岸は震災前よりも幅が広くなり、護岸の背後に高さ2.15mの防潮堤が建設されている。したがって海は見えない。後述する尾形さんは「こんな防潮堤は必要ない」と指摘していた。



災害公営住宅（左）、朴島の集落（右）

種ガキ

寒風沢島から朴島に至る航路の両側は種ガキの養成場となっており、垂下棚が並ぶ。

わが国のカキ養殖の種苗はそのほとんどが天然種苗で、その産地は宮城県に集中している。宮城県の中でも石巻市以南の万石浦、石巻湾とこの松島湾が有力な産地だ。松島湾の中では内湾域に位置するこの朴島が古くから種ガキの産地であった。

養殖中の母貝から発生した浮遊幼生は、外洋的な環境だと速やかに拡散してしまうが、松島湾のような内湾的環境下では浮遊幼生を高密度に保つことができるからだ。

松島湾の種ガキ生産の歴史は1877（明治10）年ごろにさかのぼるほど古い。戦前および戦後まもない時期も松島湾から盛んにアメリカに種ガキが輸出されたのである。

このように日本のカキ養殖は宮城県の種ガキにほぼ大きく依存しているので、震災によって種ガキの生産にどのような影響がでるか心配された。学者のなかには、震災によって種ガキの供給が途絶え、外国から種苗を持ち込むことになる国内に病気がまん延するのではないかと危惧する向きもあったが、震災の年から種ガキの生産が再開され、杞憂に終わっている。

カキの産卵期は夏季である。宮城県水産技術センターは7～8月にかけてカキの浮遊幼生の調査を実施し、定期的に「種ガキ通報」として情報を発信している。種ガキの生産者はこの情報に基づき、にプラクントネットを曳いてサンプルを集め、顕微鏡でカウントし、幼生の数を確認、ホタテガイの殻を付着器として、浮遊幼生の多い海域に設置して採苗する。採苗器はホタテガイの殻72個分をロープに挟んだものを1連とする。浅所に竹で棚を作り、採苗したホタテガイの殻を吊るして育てる。

種ガキの生産は震災の年（2011年）の夏に早々と再開したが、この年は例年の4割程度にとどまった。しかし翌年は順調だった。2013年は、7月下旬の前半戦は好調だったものの、後半戦はきわめて不調だった。このように年によって変動が激しい状態が続いたが、後述する内海さんによると、ここ数年の採苗は好調とのことだ。ちなみに1度使用したホタテガイの殻の方が、幼生の着生はよいという。

棚は孟宗竹で作られているが、数年に1回ほどの頻度で更新しなければならず、この作業が高齢化の進行とともに大きな負担になっているようだ。



種ガキを養成する竹の棚（左）、採苗用のホタテガイの殻を吊るすロープ（右）

防潮堤

上陸したものの、待合所であった訪問客以外に人はおらず、取材もままならない。とりあえず、島の中を見て歩くことにした。最初に集落背後にある神明社という神社を訪ねる。30段ほどの階段を登ると、トタン張りで引き戸はサッシという現代的(?)な神社が現れた。小さな島で人も少なく、お金がないからやむを得ない。

20分も歩き回れば行くところがないような小さな島だが、北に向かう。島の周囲の自然の海岸線以外は防潮堤で囲まれていて、海を見ることはできない。港から少し離れたところに2軒の家が連なっていた。後述するカキ養殖を営む川畑さん兄弟の家だ。この家の前には道路を隔てて巨大なコンクリートの防潮堤があたかも塀のように建つ。部屋から海を見ることができないだろう。

川畑さん宅から北に向かうと小高い丘があり、墓石が並んでいた。全部で12基の墓石があり、苗字別の墓石数は次の通りだった。

土井：4、内海：2、尾形：2、鈴木：2、木村：1、川畑：1

土井姓が4基と最も多い。おそらく朴島の最盛期の世帯数は墓の数だけあったにちがいない。

丘を降りてさらに北に歩くと、農地があり、その先に頑丈な防波堤が現れた。上に登ると、チリ津波の後につくられたと思われる古い防波堤の背後に、二重に新たな防波堤が造られていた。なおこの下の農地は後述する渡辺採種場が松島白菜の種を採るために自営しているとのことだったが、まだ準備はされておらず、雑草が生い茂っていた。

港に戻る途中で、公営住宅に住むおばあさんに会った。暑いので、涼みに木陰にきたという。彼女から島の情報を得るが、後にお会いした人の話と整合性がとれず、不正確だった。



家の前面に建つ防波堤（左）、チリ津波の時につくられた防波堤の内側に二重につくられた防波堤（右）

内海ご夫妻

内海さんの家の前まで来ると、内海光男・やゑ子ご夫妻が幸運にも家に入るところだった。2016年に朴島に来た時に話を聞いた人で、その時、奥さんは採苗用のホタテガイの古い貝殻を叩いて付着生物を落とす作業をしていた。

私のことを覚えていて、家の中に案内してくれた。麦茶と梅酒の梅を御馳走になる。島に自動販売機がなく、喉が渴いていたので麦茶はことのほか美味しく感じられた。梅の木が島の台地上の圃場脇に植わっており、今年は梅干しを150kgほど漬けたという。種ガキの出荷時期になると、塩釜や仙台から毎年手伝いの人が来るので、その人たちに自家製の梅干しを提供するらしい。



内海やゑ子さんの実家（左）、ホタテガイの殻の付着物を除去するやゑ子さん（右）（2014年撮影）

彼女は当時、宮城県漁協の女性部長をしていたが、現在もその役を継続している。代りの人がいないという。夫の光雄さんは浦戸東部漁協の運営委員長である。

夫妻の住所は寒風沢島だが、彼女の実家を拠点に朴島で種ガキを生産している。また、8

年前にお会いした時は種ガキ生産と併せて後述する松島白菜に種づくりをしていたが、こちらは3年前にやめたそうだ。ご主人は73歳になり、後期高齢者になったら種ガキの仕事もやめるといつていたが、海と畑の仕事の両立は年長的に難しくなったのかもしれない。

ただ畑を荒らすのは忍びないとのことで、空いた畑にアジサイや桜を植えているそうだ。

白菜採種場

集落背後の台地上に細長い農地が続いている。ここは古くから白菜の種子を採取する圃場であった。

白菜はアブラナ科の植物で、同じ科の異種と交雑しやすい。純粋の種子を守るためには白菜以外のアブラナ科植物の花粉が混ざらないように隔離する必要がある。離島は海で隔てられているため、異種の花粉や媒介する蜂が飛んでこないのが恰好な条件を備えているわけだ。

こうした島の隔離条件に目をつけた美里町小牟田^{こむた}に本社がある(株)渡辺採種場の創業者は1923(大正12)年に桂島^{かつらじま}に圃場を求めて採種場を確保した。その後、周辺の島にも圃場を広げ、朴島にも採種場を確保したのである。しかし震災後、朴島以外の島々は栽培をやめ、現在、採種地として残っているのは朴島だけになってしまった。白菜は春に菜の花を咲かせ、畑は黄色に染まり、この風景は島の観光資源にもなっていた。

朴島では長いこと内海さんと土井さんの2戸が台地上の圃場で渡辺採種場から委託されて白菜を植えていたが、内海さんは3年前にやめ、土井さんの畑だけになってしまった。もともと土井さんのお母さんが主として耕作していたのだが、震災後に亡くなられたため、現在はサラリーマンを定年退職した息子の優さんが後を継いでいる。土井さんは、「大した収入にはならないが、代々続けてきた春先に菜の花で覆われる島の風景を残したい」と語る。

9月に入ると渡辺採種場から白菜の種が届くので、これをポットに蒔いて苗をつくり、10月ごろに植え付ける。翌年6月ごろに種子を回収する。

朴島以外では栽培をやめてしまったため、種子の量が確保できなかったためなのか、震災後、上述したように島の平地にも圃場を確保し、渡辺採種場が直接白菜を栽培している。



粗おこしが終わった土井さんの圃場（左）、収穫まじかの白菜の種（2014年）（右）

内海さん宅を後にしてから、集落背後にある台地上の畑を見に行ったら、手前が土井さん、奥が内海さんの畑である。土井さんの畑はすでに雑草は刈り払われて、粗おこしが終わっていた。奥の内海さんの畑は雑草に覆われないようにとの配慮からヒマワリやキバナコスモ

スなどが植えられていた。内海さんによると、アジサイや桜、ブルーベリーなどの苗木を植えたとのことだが、現地では確認できなかった。

台地から降りてくると市営住宅に住む土井優さんが、脇の倉庫から農具を取り出し、畑に向かうところだった。立ち話をする。土井さんには8年前にも会っているが、その時は刺網の手入れをしていた。

種カキ生産者

船着場の近くで、尾形勝利（84歳）さんがホタテガイの貝殻を挟む採苗用のロープを整理していた。朴島でお会いする6人目である。

種ガキ生産について話を聞き、脇にある作業場を案内していただいた。作業場にはプランクトンネット、実体顕微鏡2台とモニター、シャーレやビーカー、洗ビンなどがあり、さながら小さな研究室のような雰囲気である。

尾形さんが生まれて間もなく父親が戦死したので、カキの採苗技術はお祖父さんから習ったそうだ。

朴島の種ガキ生産者は、この尾形さんと内海さん、そして川畑兄弟の4経営体である。このうち尾形さんと内海さんは種ガキ生産が専業で、カキ養殖はしていない。なお、尾形さんの場合は、後述するように震災後5年ほどはカキ養殖も営んでいた。そして震災後にカキむき場をこの作業場の脇に独自に整備し、むき身で出荷もしていた。一方、川畑兄弟はカキ養殖との兼業であり、自ら養殖する分の種ガキ生産がメインである。したがって種ガキの販路はそれほど広くはない。なお内海さんは寒風沢島に家があり、奥さんの実家のある朴島で、ここを拠点に活動していることはすでに述べた。

震災前の種ガキの生産者はこの4経営体だったので、生産者数は震災以前と変わっていないことになる。

種ガキの出荷は9月中旬から始まり、翌年の6月下旬まで続く。以前は5月で出荷は終わっていたが、岩手県へは最近、6月いっぱいまで出荷するようになったので、出荷時期が1ヶ月ほど伸びている。6月まで伸びたのは、冷食向けに大きなカキを生産するようになったからではないかという。



種ガキ生産者の尾形さん、背後に顕微鏡とモニター（左）、納屋に吊るされていたプランクトンネット（右）

種ガキは、宮戸島（松島湾最大の島だが、現在は本土との間を松ヶ島橋で結ばれている）の里浜まで船で運び、ここでトラックに積み替えて出荷する。種ガキの出荷先は全国である。

漁協は種ガキの販売には関わっておらず、個人と個人の取引が中心で、種ガキ生産者は長い付き合いの顧客が多く、取引先はあまり変わらない。内海さんの出荷先は長崎から北海道に及び、浜名湖、三重県からの注文も多い。一方、尾形さんは三重、広島、岡山、北海道などに出荷しており、仲介業者を通じて販売することもあるという。

種ガキはホタテガイの原盤 72 枚が 1 連で、この連数単位で取引する。平均価格は 1 連 900 円ほどであるが、不漁の年は 1,500~1,600 円に高騰することもあるという。

地域おこし協力隊

朴島で種カキ生産を専門にしている 2 経営体は何れも高齢である。尾形さんは 84 歳、内海さんは 73 歳だ。内海さんは後期高齢者になったら引退するといっていた。そして 2 人も後継者がいない。尾形さんには塩竈市の消防署長を務める息子がいるが、親の後を継ぐ意思はないという。そして奥さんは海や島になじみがないので Uターンも期待できそうもない。内海さんのところは 2 人の息子がいて川崎市と仙台市に住み、サラリーマンをしているそうでこちらも後を継ぎそうもない。

このまま推移すると、種ガキ生産を専業とする経営体はいなくなり、浦戸諸島の伝統的産業が失われかねない。さらには松島湾だけの問題にとどまらず日本のカキ養殖にも影響を与えかねない。こうした事態を重く見た塩竈市は総務省の地域おこし協力隊の制度を活用して種ガキ生産の後継者を募集した。塩竈市はこれまでにこの制度を活用して、桂島でノリ養殖業、寒風沢島で刺網漁業の後継者を確保した実績がある。幸い大泉さんという方が応募し、昨年尾形さんのもとで修業をしている。

彼は寒風沢島にある旧小学校跡を活用したステイ・ステーションに宿泊、自炊生活をしており、毎日朴島まで通っている。あいにくこの日は休暇をとっており、会えなかった。

地域おこし協力隊は最大で 3 年間、塩竈市から給与が支給される。2 年後には尾形さんの後を継いで種ガキ生産者になることが期待されている。尾形さんの取引先からは後継者のことを心配する声が寄せられているが、後継者ができたので安心して欲しいと伝えているそうだ。地域おこし協力隊によって朴島の伝統的産業が若い人に引き継がれ、新しい後継者育成システムとして定着していくことになるのか、注目されている。

カキ養殖

震災前、朴島では 5 経営体がカキ養殖を営んでいた。震災後にそのうちの 1 人が死亡、さらにもう 1 人（当時の区長）も高齢のため廃業したので、6 年前に訪れた時には 3 経営体になっていた。ちなみに当時の区長は既存のカキ養殖業者の手伝いをしていたが、この人も最近亡くなったそうだ。

3 経営体のうちの 1 経営体が上述した尾形さんであった。震災後にカキ養殖の方がやめる予定であったが 1 年後に思い直し、自らむき身の処理場を整備して、カキ養殖を再開していたのだ。しかし 5 年間カキ養殖を続けた後、高齢化して体力的にも限界を感じてきたためカキ養殖の方はやめ、現在は種カキ生産を専業としていることはすでに述べた。

震災前から継続してカキ養殖を営むのが川畑兄弟（川畑敏雄、栄彦兄弟）で、朴島ではこの 2 経営体だけになってしまった。川畑兄弟の家は上述したように集落の外れに 2 軒並ん

でいる。朴島のカキ養殖漁場は松島湾外で、水深は深い。松島湾内は水深が浅いため簡易垂下方式が中心だが、朴島のカキ養殖2経営体は延縄式で養殖している。

なお朴島にあったカキの処理施設は地盤沈下で使い物にならなくなったため撤去された。震災後、寒風沢島にいち早く共同処理場が新たに作られたので、朴島の2経営体はここを利用してカキむきを営んでいる。

朴島を含め宮城県の多くのカキ生産地では西日本各地のように外国人のむき子を雇用していない。もっぱら地元の人がむき子である。しかし、過疎と高齢化が進む中でむき子の確保が難しい状況になっている。桂島や野々島でカキ養殖をしていた人の奥さんなどが手伝うことにより辛うじてむき子を確保している状況であり、長続きするとは思えない。カキ養殖を持続するには殻付きカキの出荷に転向するか、外国人労働力を導入することが必要であり、浦戸諸島のカキ養殖は大きな岐路にたたされている。

松島湾でカキ養殖をしているのは、浦戸の4戸、桂島の3戸、野々島はすでにカキ養殖をする人はいなくなっており、松島湾のカキ養殖は震災前の半分以下になってしまった。



延縄養殖の準備作業（左）、延縄のロープとボンデンブイ（右）（何れも2014年撮影）

16時30分発の塩釜市営汽船で塩釜港に戻る。1人が朴島で降り、乗船したのは私だけだった。寒風沢島から5人、石浜から4人、野々島から18人、桂島から5人が乗船した。

翌日、桂島を訪問することになっていたので、本塩釜駅に近いホテルグランドパレス塩釜に泊まる。ホテルの目の前の「港町の鉄板焼」という店で夕食を食べたが、この店のオーナーは寒風沢島出身だった。